

# 人生ハンド仏句

第68号

H.19.11.1  
(毎月1日発行)

## 日々の精進

住職 谷川寛俊

お互いに気心が通じれば、会話の中で指示語(これ、それ、あれ)などを使うことが多くなります。ア・ウンの呼吸なのか、コレ・アレでそれが何を言おうとしているのか、分かってしまいます。

その典型が夫婦、とくに長年連れ添った中の会話です。夫が妻に「アレどこだ?アレをコレするあのアレだ!」と言えば、妻は聞き返す事無く、夫の言わんとしている物をさっさと持ってきてしまう。

昔こんな話を聞けば、微笑ましい夫婦だなと思ったものです。しかし最近はその思えなくなってきました。

秋田県にお寺の住職でありな

がら、大病院で医学部の教授をしている友人がいますが、彼が言うには、こういった指示語だけの会話は、ボケ防止には大敵であるというのです。

言葉だけを並べる会話も良くないそうです。妻に「飯」「お茶」だけで通している夫には、妻が必ず「飯が何なの?」「お茶がどうしたの?」と聞き返すようにすすめた方が良いと言っています。

一言で済ますのではなく、一つのセンテンス(文)として話をさせないと、夫のボケがどんどん進んでしまうと言っています。

なるほどと納得するばかりであります。

更に又、夫も妻も子供も老人も、人間に生まれて来た以上、その人の内面から出てくる「自然の優しさ」「無理に作り上げた優しさは長く続きません。」「日頃の信心、つまり心素直に仏様に向って手を合わせる習慣を身に付ける事が一番大

編集・発行

玉蓮山 真成寺

編集部 谷川久仁子

TEL・FAX (0765)22-2268

メールアドレス

kokorochantk@ybb.ne.jp

ホームページアドレス

<http://www.geocities.jp/sinjyoujitoyama108/>

切なのです」と。

先月号にも少し触れましたが、

法華経方便品の「言辞柔軟・悦可えつかしゅうじん

衆心」

言葉遣いというものは、その人の本来持っている心の優しさ(慈悲の心)からほとぼしるものであり、その事が周囲の人達に及ぼす事になるというのです。

過日東京より親子三人で墓参りにみえられた方がいました。このご家族の方も正に「言辞——」を絵に描いたような方々でした。そしてその基本となるものは、法華経、お題目の信仰に徹することによって自然に培わせれて来るものなのではないかと思えます。



法事は逢事、報事、そして宝事  
ご先祖さまに逢い  
その恩に報い  
明日への糧になる